

第15回 「未病」＝「防災」

IT生

近頃の健康志向や医療費の膨張への不安などから、「未病」ビジネスが盛んになりつつある。慢性疾患にならないように、様々な情報提供や健康診断、検診、運動機会の提供などのことを指すが、目指すところは「国民の行動変革」だという。

「防災」のめざすところもまさにこれである。ところで、行動変革とは日々の積み重ねのことを指す。ピンピンコロリの最期を迎えるために、健康的に生活を送る。災害が起きても、命を落とさず、生活への影響を最小限に抑えるために、自然災害の事を学び、避難計画をたてておく。もっとも、これらのことは、ひとりではできないから、自ずと、コミュニティの強化につながる。そうすると、あちこちから様々な智恵がわいてきて、永続的な発展により好循環社会の形成につながる。



避難者どうしの声かけで命をまもりぬいた「釜石の奇跡」の人々。

背景にはコミュニティがひごろから培った創造的行動があった。

地域を行き交う人々がお互い声をかけあって、社会の破綻を防ぐのである。そこには、誰か突出したリーダーがいるわけではない。様々なシーンのなかで、その場にいる老若男女だれもがリーダーになりうるのである。

学校だからといって、先生が生徒を守らねばならない、生徒は先生の指示を待たねばならないというものではないのである。岩手県釜石市では、東日本大震災の際、3000人近くの小中学生がほぼ全員無事であった。まさにそのとき、「避難しよう」と号令をかけたのは、先生ではなく、生徒の方であった。この背景には、まず、当地で、防災教育がふだんから盛んに行なわれてきたからということだけではない。その積み重ねが、ひとりひとりの行動変革につながり、地震の大きさにおののきながらも、生徒をはじめ、教員、地域の人々が声をかけあって、お互いの命を守りきったのである。

非常時になると、日本社会では、だれかをリーダーにまつりあげるかわりに、だれが責任者かを問いたがる。しかし、健康や防災といったその土地の風土や歴史に根ざす普遍的なテーマへの対処を考える場合、一般的な組織論では太刀打ちできないのだ。

つまり、「国民の行動変革」を求めるということはそういうことを指し、現代の日本社会への問いかけでもある。

免疫学者として、また能楽者としても知られた多田富雄・東大名誉教授は「自然災害と人間の行動様式」と題した一文で、こう記した。

—自然は怒っている。しかしそれは環境問題をはるかに超えた人間の行動様式の危機をもたらしている。(中略)管理社会の問題を浮かび上がらせてきたようだ。個人に情報が適切にふられていないから、人は創発的になすべきことを選択できないのだ。危機に際してこそ、情報を主体的に利用し、創造的な行動を生み出すことが必要なのだ—

宮城県石巻市の大川小学校判決を受けて（平成28年10月）